



海外 博物館 事情

ブラジル



歴史変遷の象徴

サンパウロ市の2つのミュージアム

菊池 渡 (サンパウロ大学日本語日本文学コース助教授)

はじめに

ヨーロッパ先進諸国におけるミュージアム建設は国家形成、社会の近代化と深い関りをもっている。ブラジルはそのプロセスと密接な関係をもつアメリカ大陸植民地化の産物である。その主要都市サンパウロにおけるミュージアム建設はどのような性格を持ち、歴史的にはどのように考察できるのだろうか。

サンパウロ市は452年の歴史を誇り、南アメリカで最も古い都市の一つであるとともに、人口1,040万人の大都市である。ミュージアムも全部で35あるが、敢えて二つ選ぶなら、ここで紹介するサンパウロ大学パウリスタ(イピランガ)博物館とアシス・シャトーブリアン・サンパウロ美術館になる。以下、収蔵品を紹介しながら建設の歴史にスポットを当てて簡略に述べる。

1 サンパウロ大学パウリスタ博物館

イピランガ博物館の名称でも知られるサンパウロ大学パウリスタ博物館(以下パウリスタ博物館)は1895年に開館された、サンパウロで最も古い博物館である。

設計者はイタリア人のトマス・ガウデンツォ・ベッチで、1822年9月7日にポルトガル皇太子ドン・ペドロがブラジルの独立宣言をしたイピランガ丘陵に独立記念モニュメントとして、1885年から90年まで5年を費やして建てられた。前面にはベルサイユ宮殿を模した庭園が広がり、通りを一つ隔てた先には独立宣言に際して「独立か死か」と叫んだとされるドン・ペドロの像を含む131体のブロンズ像からなるイピランガ独立記念像が見える。同博物館は1963年にサンパウロ大学付属博物館になり、現在に至っている。(写真1)

パウリスタ博物館では肖像画、文献なども含めて12万5千点を超える所蔵品を常時展示している。年代的には最古が17世紀のものから、19世紀末から20世紀半ばまでを主たる対象としている。

パウリスタ博物館の建物は地上2階、地下1階で構成されている。1階の廊下には19世紀末の口バ引きの消防車、

衛生局の消毒剤運搬車などが展示されており、間近で観賞できるようになっている。

2階の各展示コーナーには椅子や筆筒、ベッドなどの家具、食器、ミシンなどの家庭必需品から拳銃、鉄砲、サーベルなどが展示され、19世紀末から20世紀にかけての市民、主に上流階級の暮らしぶりが見て取れる。

地下には陶磁器、蝋燭立てなどの照明器具、インテリアデザインのコーナーのほかに当時の有力者の肖像画、風景画、また宗教的モチーフ、庶民の生活などを描いた油絵、水彩画の展示コーナーがある。

パウリスタ博物館は20年代前半まで自然史博物館とされていた。しかし、1927年には植物学セクションが生物農業保護センターに、1939年には動物学セクションがパウリスタ博物館と同敷地内にあるサンパウロ大学動物学博物館に、そして1989年には考古学、民族学セクションがサンパウロ大学キャンパス内に考古・民族学博物館としてそれぞれ移転され、別個の博物館として独立させられたことは特筆されるべきであろう。それは歴史博物館として確立させることにより、パウリスタ博物館をサンパウロの政治・歴史的重要性の象徴にしようとする地元政治家の思惑による。それについての詳細は後述する。

2 アシス・シャトーブリアン・サンパウロ美術館

通称MASP(Museu de Arte de São Paulo、サンパウロ美術館の略)の名で親しまれているこの美術館は1947年10月2日にジァリオス・アソシアードス新聞社オーナーで当時のマス・メディア王と言われたアシス・シャトーブリアンとジャーナリストであり、かつ芸術評論家でもあったイタリア人ピエトロ・マリア・バルジによって創設されたが、現所在地パウリスタ大通りに移転したのは1968年のことである。それまではジァリオス本社ビルの全4階を改造して使用していた。ブラジルに西洋先進国に匹敵する近代的美術館を建設するのが当初からの目的であった。

南米一のビジネス街パウリスタ大通りビル群の中で、

ひときわ目立つ設計の建物がMASPである（写真2）。2階のガラス張りの建物が4本の赤い柱によって支えられ、まるで宙に浮いているかのような設計は通行者側から見る都心の景観が遮られないようにとの設計者リナ・ポ・バルジの工夫だったと言われている。

MASPは絵画、彫刻、写真など千点を超える作品を収蔵し、交代で展示している。コレクションの中で主要なのは中世以降の西洋絵画で、13世紀のピガロの作品がもっとも古く、一番数多いのはフランス印象派のルノアールを筆頭にマネ、セザンヌ、モネ、ロートレックなどの作品である。他にもゴッホ、ピカソやイタリアのラファエル、ボッチチェリ、スペインのグレコ、ゴヤ、そしてドイツ、オランダ、イギリス、メキシコなどの作品を収蔵している。

ブラジル人画家ではセガール、ジ・カバルカンチ、ポルチナリなどが代表的であるが、訪問時にはほとんど展示されておらず、片隅に追いやられている感が否めなかった。

シャトーブリアンは当初、当時の首都リオ・デ・ジャネイロ市に博物館を建設する意向だったといわれている。しかし、個人コレクションを代表的な美術館規模に発展させていくためには相応の寄付が必要で、すでに衰退しつつあったリオよりも資産家の多いサンパウロの方が有利との見解によって最終的に決定が下された。沿革にはジアリオ社の重役で後の館長エドムンド・モンテイロの尽力が大きかったと記されている。財・政界との太いパイプラインを活用して今日のMASPを築いたのである。

おわりに

博物館はコレクション（収集）とエキジビション（展示）の二つの行為が一体化したシステムであるが、ヨーロッパにおいては、王侯や貴族、そして植民地の宗主としての国家が権力を誇示するためのものであったと梅棹忠夫（2000）は言っている。

そのような観点からパウリスタ博物館を捉えるなら、初期の主旨は独立記念モニュメントとして独立国家の権威を知らしめることにあったと言える。1889年の共和国制導入につながる一連の運動はサンパウロの共和党を中心としたものだった。後に博物館として開館した経緯をたどると、サンパウロの政治勢力が新体制において存在感を示す手段の一つとしたところにある（ALVES, 2001）。サンパウロにおけるパウリスタ博物館の充実により、旧立憲君主制を象徴するミュージアムのある首都リオ・デ・

ジャネイロに対抗する意図があったのである。

一方、MASPは規模の違いはあれ、エキジビションにおいて先進国に比肩することで同等のステータスを得ようという一実業家の意図で実現した。その建設には先進国を手本にブラジルの近代化を図ろうとするエリートの見解が反映している。しかし、なによりもMASPがサンパウロに建設されたことに深い意味合いがある。共和国制移行で政治的に台頭を表したサンパウロは経済的にもブラジルの中枢として揺るぎない地位を確立しつつあった。MASP建設はそういう時代の動向を象徴していると言える。

サンパウロの2つミュージアムは梅棹説の「文明の記憶装置」として古き時代の遺産を保存するとともに、歴史変遷、時代転換の象徴とも位置付けられるのである。

写真1



サンパウロ大学パウリスタ博物館

写真2



アシス・シャトーブリアン・サンパウロ美術館

引用文献

- 梅棹忠夫著『近代世界における日本文明 比較文明学序説』
中央公論新社、2000年
ALVES, Ana Maria de Alencar. *O Ipiranga Apropriado*.
São Paulo, Humanitas FFLCH / USP, 2001